

5. CYRの活動(3)カンボジアの伝統文化を守る～失われかけた「藍染め」の復興～

カンボジアは美しい織物文化をもち、特にバナナの皮などで防染加工施した糸を草木染めし、絵柄を織り込んでいくかすり布は、近隣諸国へ輸出されるほどでした。農閑期になると女性たちが家事や育児の合間に染めや機織りをする姿がよく見られましたが、内戦で織り機は焼かれ、多くの織り手が命を落とし、染色技術は途絶えかけました。CYRは、この伝統文化の復興をめざし、同時に女性の収入の一助になるように、1993年より、織物技術研修を実施しています。研修内容は、カンボジアで広く使われる綿スカーフを織る基礎技術から、くくり染めとかすり織り技術までさまざまです。また、内戦で焼失した伝統的な模様を織った布を写真から復元し、文化保全にも取り組んでいます。

メコン川流域のコンポンチャム州アンコールバーン村では、藍がよく育ち、藍染めは村の大切な産業でした。村人は染液にヤシやバナナ、あくを加えて染める自然染色の手法で、ポル・ポト時代にも藍染めを続け、強制労働を強いられていた当時、1日に約5キログラムの綿糸を染めて織った布をポル・ポト兵に渡したといわれます。そのようにして続いてきた藍染めが内戦後の厳しい生活の中で廃れ失われてしまい、CYRが2007年、村を訪れ、技術復興に乗り出しました。以前、藍染めをしていた村のお年寄りから、昔ながらの藍染め方法を習い、また、日本人専門家の協力も得て、村に伝わる染色方法を踏襲しつつ、より確実な藍染め技術の確立をめざしました。7年の歳月を経て、綿と絹糸の藍染めに成功しました。現在は、村で織物技術の研修を行い、村人が自ら染めた糸でスカーフや布を生産できるよう指導しています。

CYRでは、染色・織物技術が村の伝統産業として、次の世代へ受け継がれることをめざしています。

(特定非営利活動法人幼い難民を考える会)

